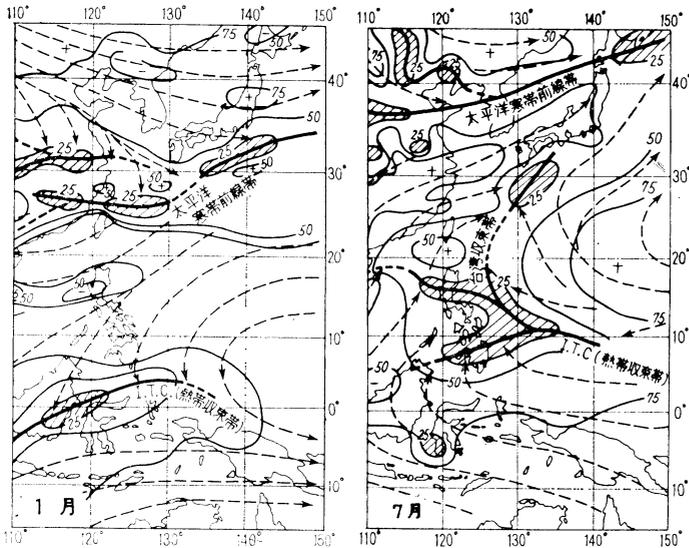


[短報]

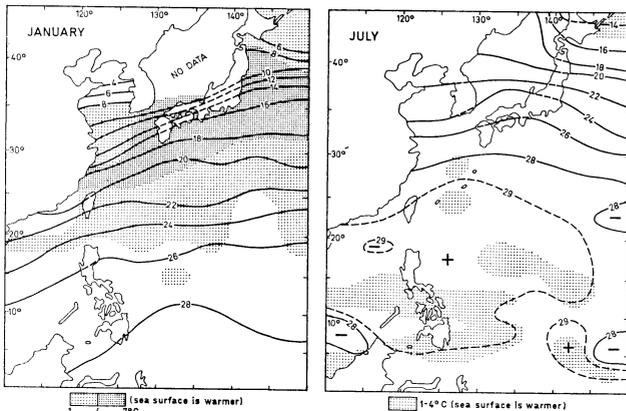
北西太平洋における寒帯前線帯・ITC

の位置と表面水温-気温差の分布\*

吉野正敏\*\*



第1図 1月(左)と7月(右)の風のステディネス(%)の分布と流線(破線). 太い実線は前線帯・収束帯をしめす(1956—1960).



第2図 1月(左)と7月(右)の表面水温(°C)と表面水温-気温差の分布(1956—1960).

南～東アジアにおける寒帯前線帯と ITC の位置について、風のステディネスの分布から前に調査した(吉野1967). その中から、北西太平洋の部分について表面水温との関係を速報しておきたい。

第1図は、2,000フィートの高度のステディネス(%)の1月と7月の分布である。25%以下の帯状の地域を前線帯または収束帯と定義した。太い実線が寒帯前線帯と ITC (熱帯内収束帯)である。破線は気流の一般の傾向である。まず寒帯前線帯は1月には東シナ海 26°N 付近、日本南岸(30°N)を経て ENE の方向に走る。7月になると 40°N 付近まで北上し、満州から日本海では不明瞭だが北海道の東方に連なる。

ITC は1月にはボルネオ付近をほぼ赤道に沿って東西に走る。7月になると 11°N 付近まで北上し、フィリピン東方で3本に分岐する。1本はボルネオ北部へ、1本はルソン島を横切って海南島に向う。最後の1本は北に向い、いわゆる台湾収束帯と呼ぶものとなる。

第2図は表面水温と、表面水温と気温との差の分布を示す。データは緯度 2°×経度 5°の各メッシュ内の船の観測値の累年平均値(気象庁1962)で、それから、第1図と同じ統計期間1956—60について平均した。まず1月には、表面水温が気温より4°C以上高温の地域が寒帯前線帯に完全に一致する。7月は表面水温が 1～4°C 気温より高い地域と ITC の位置がほぼ一致する。また北海道東方の寒帯前線帯や、台湾収束帯に相当するところでも同じ特徴がみられる。

このように前線帯・収束帯の位置は、単なる表面水温の分布(Reed 1960)より、表面水温-気温差の分布とよりよい対応を示す。Air-sea Interaction の気候学的特性のひとつと思う。

参考文献

気象庁 1962: 北太平洋海洋気候表, その1. Reed, R.J. 1960: Bull. amer. met. Soc. 41 591-598. 吉野正敏1967: 日本気象学会春季大会発表予講集11, 55-56.

\* Position of the Polar Frontal Zone and the ITC and Distribution of Difference between Sea Surface and Air Temperature.

\*\* M.M. Yoshino 法政大学地理学教室—1968年6月6日受理—